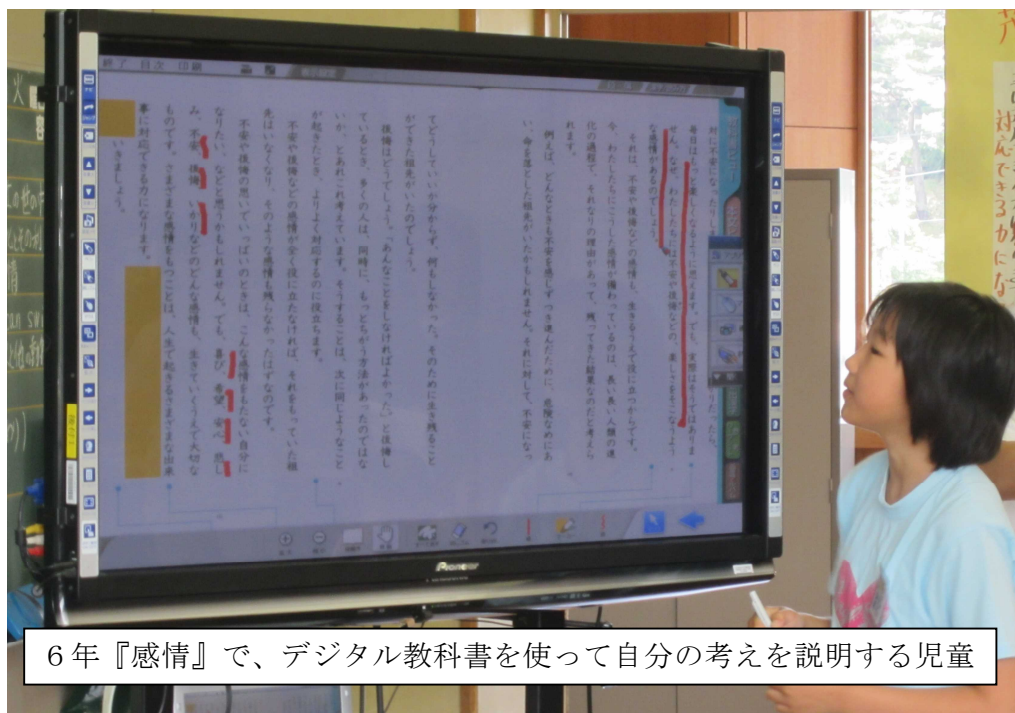


国語科学習指導案



6年『感情』で、デジタル教科書を使って自分の考えを説明する児童

期 日 平成25年11月7日(木) 第5校時 (13:55～14:40)

単 元 読んで、せつめいのしかたを考えよう
「しかけカードの作り方」

指導者 長野県総合教育センター 企画調査部 専門主事
三ツ井邦仁 先生

授業学級 2年2組 男子15名 女子9名 計24名

授業者 藤原 朱実 教諭

青木村立青木小学校

目次

I 青木小学校グランドデザイン	1
II 研究内容	2～7
1 研究テーマ	2
2 テーマ設定の理由	2～3
(1)本校児童の実態と教師の課題	2
(2)テーマ設定の理由	3
3 日常の実践から	3～6
4 研究の仮説	7
III 学習指導案	8～12
1 単元名	8
2 単元設定の理由	8
3 単元の目標	8
4 単元展開(本時の位置)	9
5 本時案	9～11
(1) 主眼	9
(2) 本時の位置	9
(3) 展開	10
(4) 実証の観点	10
(5) 教材研究	11～12
資料	



プチ学び合いで、お互いの考えを聞き合う児童

青木小学校 学校教育目標



- ①あかるい子（温かい心と思いやりの心をもつ、素直な子）
- ②かしこい子（基礎基本を身につけ、状況に応じ、自ら判断できる子）
- ③たくましい子（継続してやり抜く、強い意志と身体をもつ子）

青木村の教育目標

「心豊かでたくましい子どもの育成」
 —社会力（生きる力）を育てる—
 ・子どもと向き合う時間を確保し、人と人がつながる力と学力・体力を育て、一人ひとりを大切にする教育を目指す。

＜重点項目＞

- ①保小中一貫教育
- ②多様な他者や自然とのかかわり
- ③学力向上
- ④子どもと向き合う時間の確保
- ⑤一人ひとりを大切にする教育

保護者の願い

- ・あいさつができる子ども
- ・分かりやすく楽しい授業と体力の向上
- ・安全、安心な学校

児童の願い

- ・楽しい学校、楽しい学習
- ・友達や先生と一緒に活動したい
- ・思い切り体を動かしたい

あおきっ子教育ポイント5か条

- ①早寝・早起き・朝ご飯 歩いて登校 脳と体にスイッチオン
- ②あいさつは魔法のことば 家族で 地域で 学校で
- ③週に1日 見ない やらない テレビとゲーム 携帯電話は持たせない
- ④決めた時間は必ず学習
- ⑤心を育てる 読書と手伝い

26年度の重点目標

- 1 あいさつ 2 学び合い 3 無言清掃 4 体力づくり

行動目標

- 1 自分から明るくあいさつしよう
- 2 よく見、よく聞き、みんなで考えよう
- 3 気づきの掃除をしよう
- 4 最後まで走って続ける100日マラソン

教師の願い

- ・安心して学べる学級・学校
- ・児童の学びを大切にしたい確かな学力・体力の向上
- ・学校・保護者・地域が連携して社会力（生きる力）の育成

方 策

①保小中一貫教育



教育課程の連携 スムーズな移行

- 保小中教育課程の連携**
 （保小中一貫教育委員会）
- ・保育園児との交流学习
 - ・満点プリントの実施
 - ・中学校理科、英語教師による小学校での授業
 - ・5か条の重点化（PTAと共に）
- 保小中のスムーズな移行**
- ・保小中交流学习
 - ・体験活動、体験入学
 - ・移行支援会議

②多様な他者や自然とのかかわり



青木村を愛する活動

- 児童が青木とつながり、故郷青木を愛する取組
- ・青木を愛する活動（生活科・総合的な学習）
 - ・あいさつディあいさつ運動
 - ・学習支援ボランティア
 - ・農村体験活動
 - ・義民太鼓の活動
 - ・村教育委員会による活動（あおきっ子通学合宿、長泉町との交流合宿、大学生との交流等）

③学力・体力の向上

児童の学び合いを大切にする授業改善（同僚性の発揮）

- 三つの実践研究
- ・生活科及び総合的な学習の時間
 - ・インクルーシブ教育
 - ・ICT機器活用
- 一人一公開授業・授業研究
 同僚から学ぶ授業研究



向上におけた特色ある取組

- ICT機器の積極的活用**
 分かる授業
思考力を高める学習
 （花まる学習会との連携）
 各種ゲーム・ドリル
健やかな身体づくり
 朝の100日マラソン、
 身体を動かす遊び

客観的データの活用

- 標準化されたテストの活用**
 全国学力テスト、県PDCA事業、CRTテストの実施と分析
スポーツテストの活用
 スポーツテストの実施と分析

④子どもと向き合う時間の確保



児童の共感的理解

ふれあいの時間

児童と教師とがつながりを深め、共感的な関係を築く「ふれあいの時間」
 （月・木）25分間
 （水）40分間

相談週間・相談室・相談窓口

児童、保護者、教師の悩みにこたえる相談週間・相談室（カウンセラー）・相談窓口

⑤一人ひとりを大切にする教育



合理的配慮を大切にした支援

ユニバーサルデザインの学校・教室環境整備
 合理的配慮による授業支援会議・校内委員会の充実

心豊かな児童の育成

人権教育・なかよし旬間
 道徳教育の充実
 無言清掃

安心・安全な学校

防火・防災計画の見直し

Ⅱ 研究内容

1 研究テーマ

(1) 上小視聴覚研究大会テーマ

「子どもたちが意欲的に課題解決するための教育メディアの効果的な活用について」

(2) 青木小学校 研究テーマ

「友と『かかわり』ながら、自ら考え『学び』をつなげる子ども(3年次)

～一人ひとりの子どもの『学び』をみとり、『自ら』考える『学び合い』を目指して～」

(3) 青木小学校 視聴覚教育に対する研究テーマ

「国語科の授業における視聴覚機器の効果的な使い方」

2 テーマ設定の理由

(1) 本校児童の実態と教師の課題

視聴覚機器にかかわって

〈本校児童の実態〉	〈教師の実態や課題〉
<ul style="list-style-type: none"> ○ 授業や全校集会など、視聴覚機器を使用する場面での反応はとてもよい。 ○ パソコン教室での様子では、興味を持って意欲的に取り組む姿が多く見られる。 ○ タブレットがドリル時に導入され、機器の活用には慣れている。 ● 担任の活用状況の差が、児童の慣れに差を生み出している。 ● 自ら働きかけて、有効活用しているとは言えない。 	<p>実態・・・視聴覚機器の利用状況</p> <ul style="list-style-type: none"> ① 電子黒板を含め、大型モニターで画像や映像の提示をするように心がけている。 ② デジタル教科書の活用し、授業中も児童の学習を客観的にとらえ対応できることが多くなってきた。 ③ CD や放送設備等の音響機器も活用している。 <p>課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 個人差はあるものの、使い方や活用方法を熟知しているわけではない。 ● 便利さや有効性を実感しているわけではない。

国語科の学び合いにかかわって

〈本校児童の実態〉	〈教師の実態や課題〉
<ul style="list-style-type: none"> ○ 授業をつくりだすために、自分の考えを持ち、全体に出していくときに、発表の仕方のパターン(話型)を取り入れている。それが、少しずつ定着してきて、自分の考えを伝えられる児童が多くなってきている。 ○ 友の考えを聞き、自分の考えを深めたり、修正したりする児童が増えている。 ● 授業の終末の一人に還る場面での、学習問題に対する振り返りはだいぶできるようになってきたように思うが、自分や友の学び方に対する振り返りは、もう一歩という感がする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ すばやい課題設定と活動時間を十分とるようになってきている。 ○ 学び合いのタネをまく(「○○したい」の気持ちが生まれる)『しかけ』を意識し授業をつくりだそうとしている。 ○ 『学び合い』の前の活動(「話したい」「困った」感のある時に、ペア・グループの話し合い等)を活かし、全体での「学び合い」につなげていく授業構造をとっている。 ● 授業の終わりに、一人に還る時間として学習問題について振り返る。自分の学び方について振り返る。友の学び方を振り返る時間を確保しているが、十分とは言えない。

(2) テーマ設定の理由

本校の目指す子ども像実現に向け、『かしこい子』を支えるための研究として、昨年度国語科での学び合いを行ってきた。その研究において、①課題設定に時間をかけない。②学びのタネをまく。③学び合いの前の活動（プチ学び合い）と④全体での「学び合い」（自分の考えのとならえなおし）をつなげる。⑤一人に還る（学びを自覚し、自分と友の姿をふりかえる）。の授業の構造化と学び合いを支える要素について成果を得ることができつつある。

しかし、そうした成果が、児童自身にとって真の学びとして、児童の内側に成立しているのかについては、まだ、児童自身の内面的意識のレベルで明らかにはされていないとは言えない。一人ひとりの子どもの内側に、『学び』が確立されているのかをみとることが大切ではないかと考える。その上に立って『自ら』考える『学び合い』を目指さなければ、児童自身が創り出す『自ら』考える『学び合い』にはなっていないのではないかと考える。その点を今年度の研究で明らかにしていきたい。そのように考え、「友と『かかわり』ながら、自ら考え『学び』をつなげる子ども（3年次） ～一人ひとりの子どもの『学び』をみとり、『自ら』考える『学び合い』を目指して～」を設定した。

また、本校は、電子黒板やデジタル教科書などの視聴覚機器が充実されてきている。だからといって何でも利用すればいいというものではない。授業を子どもたちの「学び」の成立ということを、常に念頭に置き、活用・利用していこうと考えている。授業の中で『自ら』考える「学び合い」をつくる上において、視聴覚機器がより有効に活用されることにより、子どもたちの「学び合い」をより進め、伸ばすことができるのか、また授業を分析するときにも、有効活用することができるのか。その点も明らかにしていきたいと考える。

そこで、情報・視聴覚教育の視点から、研究テーマ「国語科の授業における視聴覚機器の効果的な使い方」も設定した。

3 日頃の実践から

(1) 昨年度までの研究のあゆみ

本校では、一昨年度、子どもたちの表現力、思考力を伸ばすために、算数的表現力の育成を目指し、研究に取り組んできた。その結果、子どもたちの説明する力の向上が、日常の授業や各種学力調査の結果から見るようになった。

本年度は、昨年度研究の上に立ち、さらに子どもたちのコミュニケーションの力が学力を伸ばすと考え、子どもたち同士のかかわり合いを授業の中心に据える「学び合い」の授業の構築を目指し研究を進めてきた。その入口として、連学年で国語の授業を窓口にして研究を積み重ねてきた。

(2) 青木小の模索する学び合い

青木小学校の児童は、素直で前向きな良さがある反面、少人数で固定化された人間関係の中で、自己表現に消極的という小規模校特有の課題を抱えている。そんな現状を踏まえ、青木村では「社会力の育成」をテーマに掲げ、保小中で連携して課題の克服に取り組んでいる。

青木小学校では、子どもたちの「学力」を、学習への「関心・意欲・態度」などの「見えない学力」と、学力テストで測られる「知識・理解」などの「見える学力」と、両者をつなぐ「思考力・判断力・表現力」の複合体として考えている。特に「見えない学力」が、「見える学力」を支えていると考えている。

つまり、「学ぶことが楽しい」と思えた時、いわゆる「見える学力」も向上していく。1時間の授業の中で、友達とかかわり合い、学び合って真理を手にする。そんな「学び合い」の授業を構築していきたいと考え研究に取り組んできた。

(3) 「学び合い」の授業の構築

「学び合い」を志向した個々の授業を通して、「学び合い」の「鍵」を集め、青木小学校における「学び合い」を形作っていった。

①2年の授業から（国語「ともさんは どこかな」）…①②

○「〇〇したくて」すぐに書き始めたA児（「学び合い」のタネをまく）

T「（前時は）何を伝えればいいのか勉強したね。〇〇さんが、たくさん言い過ぎて意味がないって言っていたね。」

○大事なことの提示（黒板）

【名前・年齢・男か女か・着ている服の色、種類・身につけているもの・持っているもの】

T「今日は、それをもとにみんなが問題を、迷子の人を探してもらう番です。探してほしい人の特徴を書きます。」

C「ふせん？」

C「名前は自分でつけていいの？」

・書きだせない子もいる中、プリントが配られるとすぐに記名し、アナウンスに使う特徴を書き始めるA児。（以下学習カード記述）

・〇〇タカフミ・33才・男・アイスを二つ持っています。・ズボンをはいている。・シャツは水色です。・ぼうしをかぶっている。

本時の課題が発表されると、子どもたちは矢継ぎ早に質問をする。本時の課題への意欲の高さがうかがわれる。前時から、問題作りという『しかけ』のもと、伝えたい特徴という『「学び合い」のタネ』がまかれていて、本時への意欲が十分に高まっている状態と言える。また、ここでこれからの記述の観点を示していることの効果が、後のA児の記述に表れている。



A児は、学習カードが配布されるとすぐに書き始めている。十分に意欲を持った状態でスタートした。上記のその記述内容から、見つけた中から、冒頭で教師が示した観点到に沿って、整理して書き出していることが分かる。

見えてきた「学び合い」の『鍵』

○前時一人ひとりが見つけた『特徴』（タネ）が、『問題作り』という『しかけ』によって、「早く問題を作りたい」という気持ちに醸成されている。（「学び合い」のタネ）…②

○思いを整理する教師の支え。記述する観点を絞ることで、後の論点を明確にする。…④

○「〇〇したい」という気持ちを大事にして、即活動する。…①

②3年の授業から（国語「海をかつとばせ」）…③

○必要感ある「学び合い」のサイズ

音読対話、それに続く学習問題の設定までの間で、黙っているA児

T「今日の問題。友達の感想と自分の感想を比べよう。最初に隣の人と発表してみよう。」

A児「私は、ワタルと似ているところがあります。試合に出たくて一生懸命に練習しているところ。」

H児「僕はワタルと違う。乱暴だから。」

（全体追究）

T「発表してくれる人？」

A児挙手…その後4回続けて手を挙げる。

A児「ゴルフ習っていて、みんなに追いつけるように素振りをして頑張っている。」



最初のペアでの話し合いでは、お互いが自分の意見を言ったまま終わっている。しかし、その後の全体追究でA児は、4度挙手をし、意欲的に発言しようとしている。積極的なかわりが見られなかったそれまでのかわり方と一変している。

ここでのペア学習を、「話し合い」としてではなく、自分の考えを友達に説明する練習をするためのペアのかわりとしてとらえれば、A児にとっては、全体での「学び合い」の良い布石になっている。ペアやグループ学習の目的を、いつも「話し合い」ではなく、次に全体で話し合うための準備としてとらえて仕組むこともできることが分かる。

いつ、どのくらいの人数の集団とかかわらせるかは、目的により考えられる。

見えてきた「学び合い」の『鍵』…③

○全体追究を「学び合い」の柱と考えるならば、その前のペアやグループ学習は、目的によって位置づけが様々に考えられる。すなわち、意図的に位置づけると全体追究が活性化する。

③4年の授業から（国語「一つの花」）…④⑤

○学び合いを支える環境づくりの事例⇒⑤「一人に還る」を支える（A児の姿から）

授業の中で、4回発言したA児、ふり返ると…、

- 1回目「言っていないと思います。なぜかというと…」
- 2回目「つなげて、ここからは私の想像なんだけど…」
- 3回目「つなげて、なぜ言えるかと言うと…」
- 4回目「シーン2の2行目と4行目で…」（根拠をあげる）



A児は、それぞれの発言の頭に『つなぎ言葉』を使って発言している。自分の前の児童と自分の考えを比較して、自分の発言を位置づけることができている。すなわち論理的に考えを整理しながら友の意見を聞いている。他の児童からも、「つなげて」「関連して」「違って」という、つなぎ言葉が多く聞かれた。それを支えているものは、受容的な学級の雰囲気と、授業者の「聞く」姿勢であると考えられる。教師が、一人ひとりの子の発言を正対して聞いていた。また、終末で「一人に還る」時間を保証して、具体的に「学び合い」を振り返っている。振り返りカード「言葉のキャッチボール」で、毎時間子ども自身が聴く姿勢を自己評価することが、子どもの中に「つなぐ」意識を醸成している。

前	中	後	前	中	後	前	中	後
2100 2100	2100 2100	2100 2100	2100 2100	2100 2100	2100 2100	2100 2100	2100 2100	2100 2100

見えてきた「学び合い」の『鍵』

- 教師の「聴く」姿勢…まずは、教師から子どもの言葉を大切に扱う。…④
- 終末は「一人に還る」…ア)今日の学習の振り返り イ)「学び合い」についての振り返り…⑤

④6年の授業から（国語「狂言の面白さって何だろう」）…②③⑤

○学び合いのタネを生かす事例（Y児の学びから）



狂言の面白さってなんだろう？

学び合いのタネ「狂言に共通する面白さ」

「一人ひとり思いが違う」ので、話し合い、共有する必要感が生まれる状態にある。この状態を「学び合いのタネがまかれた状態」とする。

ここで、4人グループによる「学び合い」を設定した。

（Y児のノート）授業前：歩き方がおもしろい。

→授業後：「悪いことをしている。音を昔の言葉で表現。景色。退場の仕方。歌が入っている。」

Y児は、自分とは違う考えを持った友とかかわることで、自分の考えを広げている。また、同じ考えを持ったT児に共感して、耳を傾け、相づちを打っていた。同じ意見の友達の存在は、自分の考えに自信を持つことにつながる。必要感ある4人というグループ設定がグループ全員の意見を聞くために、この場面で有効なサイズとなった。

さらに活動後に、「自分が気づけなかったことを書いてください。」という指示で、書く時間が保障されていたことも、学びを振り返り、定着させるために大切な時間の保証であった。

見えてきた「学び合い」の『鍵』

○学び合いのタネをもとに、学び合いの必要感がある場の設定…②

○目的にあった学び合いサイズの設定。…③ ○振り返りの時間の保証…⑤

記載していないが、1年・5年・専科の先生方の授業の具体の姿から、1時間の学び合いの授業のモデルを以下のようにデザインできるのではないかと考えた。このモデルを子どもたちの側から見て真の学びとして成立しているか、目線、表情、意識の流れ等をつぶさにみていくことを通して、明らかにしていきたいと考えている。

1時間の「学び合い」のモデル

はじめ

①課題設定に時間をかけない。(今日のゴールが分かる。)

- ・素早い課題設定。・活動の時間を十分にとる。

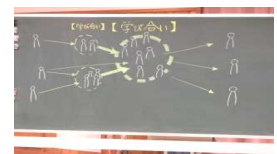
②学び合いのタネをまく(「〇〇したい」気持ち生まれる)『しかけ』

- ・子どもの中に「〇〇したい」気持ちを生み出す。
- ・「学び合い」の必要感を持たせる。「友とかかわりたい。」

なか

③「学び合い」の前の活動(「話したい」「困った」ときに、気軽に)

- ・何のために(発表練習、情報交換、話し合い)
- ・いつ?(ア計画的 イ必要感に根差して)
- ・ペアか、グループか(3人、4人、5人)
- ・様子を机間指導でみとり、全体追究にいかす。



④全体での「学び合い」(交流する中で、自分の考えを捉えなおしていく)

- ・話し合う内容を絞りきる。
- ・子どもの言葉を「待つ」「聴く」、子どもたちを「つなく」、学びを深める
「問い返し」
- ・本時の到達点に向かう舵取り。(机間指導を生かして意図的指名)

おわり

⑤一人に還る(学びを自覚し、自分と友の姿を振り返る)

- ・学習問題について振り返る。(最初の自分と比べて)
- ・自分の学び方を振り返る。
- ・友の学び方を振り返る。

4 研究の仮説

① 「一人ひとりの子どもの『学び』をみとるためには」

一人ひとりの子どもの学びや学びの成立の過程は、発言内容、発言の表情、体の向き、行動、つぶやき、感想文等に現れてくると考える。そうしたものをつぶさに見つめる。

② 「『自ら』考える『学び合い』を成立させるためには」

- 本校が昨年度模索した1時間の「学び合い」のモデルを、①の手法を用いながら検証をする。その際、客観的な視点でみるために、ビデオ、デジタルカメラ等を活用する。
- 本校で充実されてきている視聴覚機器を、『学び合い』の場を導くように活用・利用する。

Ⅲ 学習指導案

1 単元名 読んで、せつめいのしかたを考えよう

「しかけカードの作り方」

2 単元設定の理由

本学級の児童は、1学期に「たんぼのちえ」の教材で、時を表す言葉を文の中から見つけ、お話が時間の流れに沿って書かれていることを学んだ。また、時間の経過でたんぼの様子が変わっていくことを叙述から見つけたり、絵を並べ替えて考えたりした。「スイミー」の教材でも、時間を表す言葉とスイミーの気持ちの変化を関連付けて学習した。

しかし、図工の「ぼうしをかぶって」の学習で、2種類の形の違うぼうしを制作する場面で、自分の選んだ形の作り方の説明を聞いたり、作り方の紙を見たりしながら取り組んだが、切る線やのりをつける場所などを間違えたり、手順を間違えたりして、スムーズに制作できなかった子が3分の1ほどいた。国語の読み取りの場面では、担任の発問に対しては叙述から読み取ろうとしたり、適切な言葉を選んだりすることができるが、自分で問題文を読み、叙述から探し出したりふさわしい読み取りをしたりすることは苦手な子が多い。また、読み取りの苦手な子には、実際に出来上がった作品があったり、作業の途中の様子が目で見てわかるようなものがあったりした方が、それを手がかりにして読み取ることができるのではないかと考えた。

本単元では「コムラサキ公演の招待状をしかけカードにして家族に贈る」という明確な目的をもたせた。すてきなしかけカードを作るためには、作り方を読んで、どんな手順で作業をしないといけないのか、どんなふう作業しないとうまく出来上がらないのかを丁寧に読み取る必要がある。写真も載っているが、その写真は作業のどの部分のことなのかを読み取らなくてはならない。作り方の順番を表す言葉を探したり、写真を手がかりに作業の様子と叙述を照らし合わせたりしながら文章を読み取らせたい。単元の終わりには、作り方の読み取りの学習を生かして、自分の思いのこもったすてきなしかけのカードを作ってほしいと願い、本単元を設定した。

3 単元の目標

(1) 児童の活動目標

事物の仕組みなどについて説明した文章を読む。

(2) 身につけたい力（各領域の指導事項）

- ① 事物の作り方に興味をもち、書かれていることを読み取ろうとしている。【関心・意欲・態度】
- ② 手順、事柄の順序などに気づいて読んでいる。【読むこと イ】
- ③ 写真と文を対応させながら読んでいる。【読むこと イ】
- ④ 順序性を示す表現の意味を理解している。【伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項 イのウ】

4 単元展開 (6時間扱い)

次	時	学習活動	【評価】	備考
第一次	1	① 題名からコムラサキ公演の招待状をしかけカードにして作ることを確認する。 ② 誰にどんな形のカードを贈るか計画を立てる。 ③ 「じょうずにつくるためのヒント」を見つけながら学習を進めることを確認する。	【ねらいを理解し、学習の見通しをもっている。】	完成したカード
第二次	2	① しかけカードの作り方の短冊カードを使って順序よく並び替える。 《本時》	【順序を表す言葉が「じょうずにつくるためのヒント」であることを理解する。】	短冊カード デジタル教科書
	3	① 順序を表す言葉以外の「じょうずにつくるためのヒント」になる部分を叙述から見つける。	【写真があること・数字を使うことが「じょうずにつくるためのヒント」であることを理解する。】	
	4	① することの文と注意の文があることを叙述から見つける。	【注意の文を叙述から見つけることができる。】	
第三次	5	① 作り方を読みながら、しかけカードを作る。	【「じょうずにつくるためのヒント」に注目して、カードを作ることができたか。】	画用紙 はさみ・のり
	6	① 作り方のどこに気をつけて、しかけカードを作ったか発表する。	【カードを作るために気をつけたことを「じょうずにつくるためのヒント」の言葉を使って、話すことができる。】	

5 本時案

(1) 主眼

しかけカードをどういうふうにするのか興味をもった子どもたちが、短冊を並び替えて作り方の順番を考えるを通して、順序を表す言葉が「じょうずにつくるためのヒント」であることを理解することができる。

(2) 本時の位置 6時間扱いの第2時

前時：しかけカードを作るために、「じょうずにつくるためのヒント」を見つけていくことを確認した。

次時：順序を表す言葉以外の「じょうずにつくるためのヒント」を叙述から見つける。

(3) 展開

階	学習活動	予想される児童の反応	○指導 ・支援 ◇評価	時	備考
導 入	1 学習問題を確認する。	<p>学習問題：すてきなしかけカードをじょうずにつくるためのヒントを考えよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・作り方を読まないと作れないよ。 ・順番通りに作らないとうまくできないよね。 ・早くカードを作ってみたいな。 	○「今日は、すてきなしかけカードが作れるように、作り方を読みながら「じょうずにつくるためのヒント」を探していきたいと思います。」	2	
展 開	2 作り方の短冊を並び替える。	<p>学習課題：たんざくをならびかえて、しかけカードのつくり方をかんせいさせよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・簡単に並べられるよ。 ・どっちが先なのかわからないな。 ・絵を見ると順番通りに並べられそうだ。 ・この並べ方であっているかな。 ・「まず」「つぎに」は算数でも使っているから1番目と2番目だとわかったよ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・絵と叙述を組み合わせた短冊を並び替えさせる。 ・短冊を並び替えたなら、なぜその並べ方にしたのか、考えの根拠となる叙述に印をさせたり、書き込みをさせたりする。 	20	・短冊を配布
	3 並べた順番とそのわけを発表する。	<ul style="list-style-type: none"> ・「切ったところを」と書いてあったから、切る絵の次にしました。 ・「これで、できあがりです。」と書いてあったから最後にしました。 ・「こんどは」というのは、違うことの説明をしている感じがしたから、4番目にしました。 ・この順番でじょうずに作れたよ。 ・順序を表す言葉があると、作る順番がわかりやすいな。 	<ul style="list-style-type: none"> ○「どんな順序になったか、発表してください。」 ・デジタル教科書で叙述にある順序を表す言葉を確認する。 	20	・デジタル教科書
ま と め	4 今日わかったことを確認する。	<ul style="list-style-type: none"> ・順序を表す言葉があれば、作り方の順番がわかりやすい。 ・順序を表す言葉が「じょうずにつくるためのヒント」だ。 	<ul style="list-style-type: none"> ○「今日の授業でわかったことはどんなことですか。」 ◇順序を表す言葉が「じょうずにつくるためのヒント」であることが理解できたか。 	3	

タネをまく

プチ学び合い

全体の学び合い

一人に還る

(4) 実証の観点

- ① 電子黒板の書き込み機能を活用したことは、読み取りに苦手意識を持つ子や、国語学習に消極的な子が主体的に授業に参加するための手立てとなっていたか。
- ② 短冊を並び替えたことは、事柄の順序を読むための有効な手立てとなっていたか。

(5) 教材研究

○電子黒板とデジタル教科書の有効的活用

1 機能の特徴

〈電子黒板〉

- ① 児童に見せたい画面を大きく写し出せる。
 - ・デジタル教科書、DVD、写真、動画等
 - ・カメラで移した教師の示範、学習カード（→タイムリーに）
- ② 学習した画面を保存できる。

〈デジタル教科書〉

- ③ 本文や挿絵を取り出して大きく写し出せる。
- ④ 文章に線を引くことができる。（線の種類や色を変えることができる）
- ⑤ 授業で書き込んだことを保存できる。
- ⑥ 新出漢字の筆順、読み方・使い方の学習ができる。
- ⑦ 教材に即した動画、ワークシート、アニメーション等の資料で、教材の理解が深まる。

2 本單元における、電子黒板とデジタル教科書の有効性

- ① 本文を模造紙に書く手間と時間を省くことができる。
- ② 教師がしかけカードを試作する場面で、カメラを使って電子黒板に手元を写すことによって、友だちの陰になって作っている様子が見えないということがなかったり、全員が同じ方向から作り手の手元を見たりすることができる。
- ③ 共同追究の場面で、叙述に記入をしたり、考えを深めている中で書き変えたりすることが容易にできる。また、その経過を保存し、考えの経過や深まりを簡単に見返すことができる。
- ④ 単元の終わりに、学習の足跡として見返しながら、学習を振り返ることができる。

3 その他の学年、領域での活用例

〈読むこと〉

- ① 書き込み機能を活用して、教材の読みを深める。（各学年、説明文、文学教材）
 - マーカー、四角枠、吹き出し等
- ② 挿絵を活用して、教材への関心を高める。
 - ・挿し絵を拡大する。（例：3年「モチモチの木」）
 - ・2つの挿し絵を比べる。（例：1年「はなのみち」）
 - ・挿絵を並べ替える。（例：2年「スーホの白い馬」）
- ③ 四角枠、短冊資料を活用して、説明文の構成をつかむ。
- ④ 朗読の聞き比べをして作品のイメージを広げる。（例：5年「大造じいさんとガン」）
- ⑤ 映像資料で事象について共通理解をする。
 - （糸車を回して糸を紡ぐ様子。点字図書ができるまで。ありの行列の様子。
 - 「カラス貝」「いそぎんちゃく」「つくつくぼうし」などの生き物の動きや鳴き声 等）

〈書くこと〉

- ⑥ 参考・ワークシートウインドウの資料の活用で、書く力をつける。

〈話すこと・聞くこと〉

- ⑦ 動画を視聴して、話し合いの様子を具体的にイメージしや学習のスタイルやポイントを共通理解する。
- ⑧ 音声の機能を使って、「聞くこと」の学習をする。

〈伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〉

- ⑨ 大画面で解説された物を使い、理解を図る。
(3年「国語辞典の使い方」4年「漢字辞典の使い方」のアニメーション)
- ⑩ 活動画面で楽しみながら言葉や漢字の学習をする。
(2年「カンジーはかせ」3年「修飾語」4年「漢字辞典の使い方」)
- ⑪ 新出漢字ウインドウで、筆順、読み方、使い方を学習する。
児童の空書きを見ながら間違いや、つまづきをその場で確認・指導できる。
- ⑫ スライドや動画資料で伝統的な言語文化を楽しく学ぶ。
(2年「三まいのおふだ」5年「声に出して読もう」6年「狂言 柿山伏」)